

日本心理学会若手の会「企画シンポジウム事前アンケート」単純集計表

◆ 調査の目的

本調査は、若手の会企画シンポジウム「これからの若手研究者の諸問題と対処法の共有・展望」を有意義なものにするため、皆様のご意見をうかがうものでした。若手研究者の皆様に広く周知していただくために単純集計表の結果を公開します。若手の会へのご意見には、簡単ではございますが、会からの返答を記載しました。回答にご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

本調査に関する問い合わせ先
日本心理学会若手の会幹事
中川 (ynakag32_1372@a.shudo-u.ac.jp)
横光 (yokomitsuken5@gmail.com)

実施期間 2021年5月6日-5月20日
調査方法 ウェブ調査
調査対象 若手研究者 (修士及び博士の大学院生、学位取得後10年以内の研究者)
回答総数 139名

Q1. あなたの主要な専門領域を1つ選択してください。(必須)

領域	回答数	%
臨床心理学	44	31.65
認知心理学	12	8.63
発達心理学	13	9.35
教育心理学	10	7.19
社会心理学	16	11.51
産業・組織心理学	2	1.44
生理心理学	3	2.16
知覚心理学	1	0.72
実験心理学	7	5.04
学習心理学	2	1.44
数理心理学	2	1.44
性格心理学	1	0.72
犯罪心理学	1	0.72
スポーツ心理学	16	11.51
その他 (自由入力)		
ピアサポート論	1	0.72
比較認知科学	1	0.72
ライフサイエンス	1	0.72
西洋美術史	1	0.72
社会学	1	0.72
キャリア心理学	1	0.72
動物心理学	1	0.72
心理学全般	1	0.72
回答できない	1	0.72

Q2. 「研究」について、現在どの程度困っていますか？あなたの考えに最もよく当てはまる数字を選択してください。(必須)

領域	回答数	%
5. 非常に困っている	24	17.27
4.	60	43.17
3.	34	24.46
2.	18	12.95
1. 全く困っていない	3	2.16

Q3. 「研究」の中で、現在特に困っていること、直面している課題を具体的に教えてください。(任意)

内容
生理指標を用いた実験を非対面で実施していくノウハウがない。臨床群を用いた研究を実施したいと考えているがそのフィールドの開発の仕方。
そのほかの業務が多く、研究の時間を捻出できない。統計分析について気軽に相談できる場がない
新しい方法論（分析方法と測定方法）を学習する教育機会が少なく、自習では多大なエフォート（時間と労力）を要する。
大学運営や授業など研究以外に割くべき時間が多く、教員になる以前に比べて、研究時間が著しく減った。
今は自分の研究室をもったため困っていないが、院生の時は経済的な面で生活・研究が回らず非常に困った。生活面の安定が研究の進捗にも影響すると思う。
所属を移ったが、研究を動かしていくための見通しが非常に立ちにくい。他の業務に時間を取られて、研究のための時間を捻出することができていない。
キャリアが安定せず、研究の存続が常に心配である。
コロナ禍において、所属先の入構制限が厳しく、実験参加者に実験場所にお越し頂くことができない。非対面の実験への変更もハードルが高い。
教育、事務などで研究時間が確保できない。
見える化。
指導教員が、指導しない。博士10年いても、取れていない。相談したら、何か悪いことをされそう。
自身の専門と異なる分野の研究所に就職し、まわりに議論できる仲間がいなくなった。
コロナで対面の実験実施が困難な状況ですが、オンラインで実験するスキルがありません。
研究機関に所属していないので、研究倫理審査を通すところがないこと。
自身の研究について深く議論を行う機会があまりない。
すぐに必要な状況ではないですが、今後新たに取り組みたい研究手法（質的研究）を学ぶ機会が少ないです（スケジュールが合わないことも多い）。
コロナ禍で学生が大学に来れないため、実験の被験者を確保することに不安を感じている。
生理指標が取れる環境にない。また緊急事態宣言の発出により被験者の募集が困難。
患者対象研究における十分な参加者のリクルート。

共同研究者が見つからない (私自身の研究テーマも漠然としていることもあるかもしれないが...)。実践の現場である職場から研究に対する理解が得られない (学会参加の際は職場名は伏せて行うようにと言われた)。
仕事をしながら研究を行う時間をうまく作ることができていない。
研究論文を作成するノウハウが教えられず、経験的に身に付けていくしかない。
読む論文・文献の整理や、データの扱い・解析を効率よく行うやり方に悩む。
試合に関する調査だが、試合が中止になる。
調べたい調査内容にどういった方法が良いのかわからない。コロナ禍での実験方法について知識がない。
「研究」を行う時間を作ることができない。
解釈の際にその妥当性の担保が難しい。分析手法の経験者へのアプローチに悩む。
研究倫理審査をどこで受けて承認をもらうかということ、大学や大組織に所属していないので、また所属している学会には倫理審査委員会がないので困っている。
現所属が心理学以外の分野であり業績としても心理学以外のものが増えている中で、今後のキャリアを考える際に適切な研究の方向性や投稿先、あるいは分野を定めていくことが非常に難しい。いまの分野への投稿を続けていくことが今後の発展 (つまり昇進や上級職への配置) に繋がるのか、あるいは専門である心理学分野の業績を増やすことに注力すべきか展望を持ってない。
丁寧に実験しないと再現性がすぐになくなる実験で、サンプルサイズを稼ぐのに時間がかかる。
在野の研究者であり、仕事をしながら研究をするのは容易ではない。
仕事をしながら研究を両立させる時間的、精神的余裕がないこと。
投稿論文に取り組む時間的調整が難しい。
講義を割り振られていない教職員のため、学生を対象とした研究のデータ収集が困難であること。
忙しくてインプットがとれない。でも、忙しいこと自体は充実している証拠でもあるので悪いことばかりではないのですが...
生理指標などの装置を買うお金が限られている。
研究に集中できる時間が少ないこと。
臨床活動との両立が難しい。
データが貯まる一方で論文執筆に充てられる時間が少ない。
分析のやりかた。
金銭面の問題および、近くで研究しやすい場所がない。
ポジションに任期があり、次の就職先が決まっている訳ではないので、じっくりと研究に向き合えない。

お金。
授業がたいへんでなかなか研究をする時間がない。
歴史研究を行うにあたり、資料をどこから探せばいいのか検討がつかない。
非対面で情報セキュリティ高い環境で知覚実験を実施するノウハウや資金、環境がない。
コロナの状況的に、高齢者を対象とした生理実験が難しい。
コロナ禍でも実施できる研究にシフトしている為。
共同研究者探し。
学校現場とどのようにつながっていくかのノウハウ、および現在流行っている感染症のために外部機関への出入りがほとんどできなくなっていること。
研究室の研究と自分の研究をバランスよく進めることが難しく、時間外労働が増える。
競争的資金の獲得。
臨床や教育活動の間で研究を進める必要があるが、細切れの時間で気持ちを切り替えて有効に活用することができていない。
コロナ禍で実験室実験ができず、研究を上手く進められていない。
若手大学教員ですが、コロナ対応での学生への連絡やウェブ授業対応による負担増加で研究にとれる時間がかかり減ったと感じており、苦しいです。落ち着いて考える時間や家で家事をする暇もない時期もあります。
時間がない。
職場で研究をしていると白い目で見られる。妊娠期を対象にしているが、コロナ禍におけるリクルートが難しい。
研究費がない。
研究成果をどのように社会に活用すればいいか、社会実装する方法。
コロナ禍で対面実験が出来ないこと。
オンラインで実験をしたことがない、臨床心理学の中で、基礎研究の研究助成が得られにくい。
小学生、中学生などの子どものデータを集めるのが難しい。学校への調査依頼がうまくいかない。一大学院生だとサンプルを得られるコネや繋がりが少ない。
指導教員と研究の興味が合わない。
コロナで調査の仕方の大幅な変更。
実験の実施が難しいこと。
研究時間の確保が難しい。
論文の書き方。
非対面授業によって研究時間を捻出しにくく、計画が滞っている。

研究活動に取り組む時間がない。
個人情報保護の観点が普及し、容易にアンケートを取ったり、協力者を探すことが難しくなった。
インパクトのある研究計画の発想が乏しい。
研究テーマがなかなか確定できない。
乳幼児研究で対面実験ができないこと。
コロナの影響で対面実験ができていない。
事例研究を行いたいが、それを依頼する機関との関係がない。
時間知覚のように時間精度が求められる実験を、非対面で行えるか
新しい研究のアイデアが浮かばない。
研究費が少ない、調査協力を近隣の学校(中高)から得にくい。
研究外の業務が多く、研究に費やす時間が十分でない。
非対面の実験や調査だと、実施にかかる期間が長くなること、参加者の設備に影響を受けること。
新しい統計テクニックを勉強したいが、なかなか時間が取れず、数学的素養のなさも実感する
コロナ渦において、質問紙に協力してくださる学校が少ない。
働きながら資料を集めたり資料や文献に目を通す時間がない。また研究のためのフィールドがない。
対面実験がまったくできない。
コロナ禍も重なる中、大学研究室に所属していない勤務であり、研究日も研究費もない。唾液などの検体を用いた准実験や対面個別の面接データを取り扱う研究を計画する気持ちになれない。
非対面で実験方法制限がある。
フルタイム勤務でプロジェクト専従型の特任教員のため、自分の研究時間を確保するのが難しくなっている。任期終了までに次のキャリアの準備ができるかどうか、不安になることがある。
統計分析・実験実施に際するプログラミング能力。数理統計の知識不足。
動物実験ができる環境がない。
コロナ下で行える研究に限りがある。オンライン調査の実現可能性が高いが費用を捻出できない。
大学の授業があるとフィールドに行く縦断的な研究がしにくい。
査読者にオンライン調査への理解がない
新しいテーマを決めることが難しいと思います。
触発に関する実験を非対面で行う際の実験計画、妥当性の検討。

職場での時間配分と研究時間の確保が難しいです。
指標。
よくある話ですが、学務に追われ十分な時間が取れない点。
計算論モデリング等、新しい手法を絶えず習得するのに非常に時間と労力を要する。
設備や場所、学内規定の未整備、大学事務の人手などの不足により、円滑・適切に研究費を運用し研究を遂行できない。
所属機関による、購入物品への過度の制限。(多少の制限は致し方無しと考える。)
臨床群に対してデータを取りたいが、病院等、データを取るためのフィールドとの直接的なつながりが自分にはない。
コロナもあって本務多忙で時間が取れない。
人間の集中度の計測。
生理指標を用いた実験を非対面で実施していくノウハウがない、zoom等を用いてリアルタイムで非対面実験を実施していくノウハウがない。
乳幼児を対象とした調査が実施できない。研究室のメンバーがおらず、研究室の事務作業の多くを担わないといけない。
対象者から厳密な同意を得ることがとても大変で普段の臨床を研究につなげていけない。
指導教官とのコミュニケーション。
倫理面に十分配慮しているものの、取得したい指標(学校の成績など)の協力を得ることが非常に困難。
大学で数学を体系的に学んでいないため、統計手法の理解が表面的なものになってしまっている。
担当講義の多さとの兼ね合い。
研究成果をどのように社会に活用すればいいか、社会実装する方法。
生理指標を非対面で実施していくノウハウがあれば教えてほしい。
コロナ禍で、大学に行くことが制限された中での研究の進め方が分からない。
統計、データ処理方法について相談できる先生がいない。
統計解析専門の人が周囲にいないため、独学で統計を学ぶ必要がある現状。研究費不足。博士学生で応募できる民間の助成金が限られている。学振に採択されなければ研究費が無い。
校内で実験参加者を集めるのが困難。
コロナ感染予防のため高齢者の方を対象とした実験が実施し難い。
統計分析のトレンド(p=.00で記載するのが主流など)がわからない。雑誌にもよると思うが、投稿にあたり留意すべき点など、アップデートしたい。

指導・助言してくださる方の不在。共同研究の機会を得られない。
授業などに追われ、自分の研究を進める余裕がないこと。論文を読む速度が遅いこと。非オープンアクセスかつ大学が未契約の文献を手に入れるのが難しいこと。例えば専門外の他分野について知りたい、統計学や数理的手法をもっと知りたい、となった時に独学では理解が進んでいる実感を得られないこと。
アルバイトをしながら研究する時間を作ること。
研究倫理の知識の乏しさ。例えば、学校現場を対象に研究する際のインフォームドコンセントの手続きなど。研究計画倫理審査を受ける上で、何をどの程度留意すればよいか、判断に迷う。倫理的配慮の手続きが複雑になるほど、調査依頼が難しくなる（特に、中学校で中学生（未成年）を対象とする際、保護者の同意も必要となるので、調査校に難色を示されやすい）。他にも、最近投稿論文の査読プロセスで、査読者から HARKing を指摘された（指摘コメントに対応するための軽微な修正で、意図的に有意だった結果のみをピックアップして仮説設定したわけではないのですが...。でも、ご指摘いただいた査読者には感謝しています）。なお、今回は HARKing と指摘されたこともあり、その研究の論文化自体を差し控えることにしました。研究倫理については意識的に日々勉強しているつもりでしたが、まだまだ不勉強で悩むこと・困ることが多い。
特になし。

Q4. 「情報発信・ネットワーク形成」について、現在どの程度困っていますか？あなたの考えに最もよく当てはまる数字を選択してください。(必須)

領域	回答数	%
5. 非常に困っている	14	10.07
4.	47	33.81
3.	36	25.90
2.	25	17.99
1. 全く困っていない	17	12.23

Q5. 「情報発信・ネットワーク形成」の中で、現在特に困っていること、直面している課題を具体的に教えてください。(任意)

内容
ネットワークがオンライン中心となり、なかなか広がらない。
新しいネットワークが広がらない事が今後どの程度影響してくるのか、不安である。
海外の研究者と共同研究をしていきたいが、共同研究を行えるレベルまでのネットワークを築くことが難しい。
異なる分野の専門家との共同研究を始めるきっかけが少ない。
困っていないわけではないが、積極的な情報発信をこななかったため、そのために割く時間が確保されていない。
オンラインの学会ばかりとなり、ネットワーク構築に困難を感じた。
特になし。ただし、困っているほどではないが、オンライン懇親会に比べ、対面での懇親会の方が初めてお会いする方にご挨拶しやすかったり、他愛のない話もフランクにしやすかったりしたと（懐かしくさえ）思う。ピアな方々とは変わらずに情報交換させて頂いているが、新しい出会いは確かに減った。
オンライン学会だと雑談ができないのでちょっとした情報交換がむずかしい。
パソコンのスキル。
対面だと雑談の中から始められるような研究の話も、オンラインだとわざわざそのために時間を取ってもらうことになるので、なかなかハードルが高いです。
特にネットワーク形成について、外部の先生に研究協力を求めるノウハウが自分がない。
自身の業務内容と研究分野が異なるため、研究に関するネットワークが築きにくいです。
学内で先輩や同期、後輩、先生方など気軽に話す機会が無くなっている。
学会での交流の制限。
地域の医療機関で働く心理職に対して研究協力をお願いしたいが、新規に開拓する機会が見つからない。
対面の出会いがない(オンラインだといつでもというメリットがかえってデメリットになることもある)。若手の会 ML にもう少し投稿してもよいのになあと思う。
学会が全てオンラインとなったため、ポスター発表などの場で他の研究者と交流しにくくなってしまった。
オンラインが大変、電波があまり良くないのかパソコンの調子が悪い。
内向的なので、あまり新しいネットワークが広がらない。

SNS に関して、経歴を詐称する方や不正確な情報を見る頻度が増加している印象を受ける。
指導教員の目があるので、うかつな発信ができない。ハラスメントで訴えると、その先生と仲のいい先生まで攻撃してきそう。
発信してもレスポンスがなくて困った経験あります。
仕事が忙しく学会などに参加できない。オンラインのため、個々人と話しにくい。
オンライン学会では新しい知り合いがあまりできない。
他大学に知り合いはゼロです。これがまずいことなのかも実感する機会がないです。
学会等がオンライン開催になったことにより参加が容易になったが、いつでもどこでも研究発表を見られるという簡易さが逆に外部の方から意見をいただくことを阻害しているように感じる。(いつでも見られるから参加や質問を後回し、あるいは見ない、など) 学会を通じた外部の方とのディスカッションの量が減ってしまったため、研究を発信し、発展させるという点で困るようになった。
諸先輩方にお声がけいただくことが多く、特に困ってません。
ツイッターが結構つかえるなということが最近わかってきた。それまでは結構困っていました。
学会がオンラインになったことは歓迎するが、その学会の情報が入手しづらい。
ポジションに任期があり、次の就職先が決まっている訳ではないので、情報発信・ネットワーク形成に取り組みにくい。
情報発信したら、叩かれるのではないかと思う。
自分と同じ研究科の人しか分からず、他大学がわからない。
学会がすべてオンラインとなり、新しいネットワークが広がらなかった。
新しいネットワークを築く場が少ない。
学会がオンラインになってことにより、発表に対する反応がほとんどわからなくなった。
大学院から卒後専門領域が少し変わり、そのタイミングで学会がすべてオンラインになったため、新しいネットワークが広がりにくい。
懇親会がないことで、新たな関係を築きづらい。
学会等で少し会話をしてもその後のネットワークにまで発展しづらい。関心や問題意識の近い若手でディスカッションをしたり、チームを組んだりする機会が欲しい。
ポストドクであるため、プロジェクトの関係者以外との交流が希薄となりつつある。
国内で同様の研究をしている研究者が少ない領域では学会がオンラインになり、一切コメントがもらえず発表の意義を見失いつつある。

新しいネットワークを形成できない。
学会がオンラインになり人脈作りが難しい。
同じ研究領域の仲間がいない。
Zoom でミーティングや発表など、やり取りはできるが、以前のように研究会などの雑談を含めた自由な交流が限られていて残念に感じている。
研究室で生理指標系を扱うネットワークに繋がりが少ない。基礎系の研究の繋がりが少ない。
自分の大学は年々博士進学者が減っており、私が博士課程に入学した際は同じ分野の先輩が一人もいなかった。そのため、身近に頼れる人、質問できる人がいなかった。
地域によっては、他大学が近くにないため、地域単位の学会や研究会がなく、学会の有無に関わらず交流の点において不利であると感じている。
オンラインの場合、wifi の回線が良好であることと、整った環境が用意されていることが前提のため、その辺りの準備が面倒。
昨年から原則非対面により指導教授とのコミュニケーションが取りづらいことと、学会情報や論文投稿など研究活動についての情報の共有の機会がほぼないこと。
オンライン化により学会での意見交流がしにくくなった。
情報発信したいが時間が取れない。
他の研究者との交流。
コロナ禍で新しい研究仲間を作ることができなくなります。
学会がオンライン開催となり、とくにポスター発表ではコメントを全く頂けず、情報を発信できているのか不安になった。
対面学会の機会が失われており、他の研究者とコミュニケーションが取りにくい。
研究会などが現在どのようなものがあるのか身近に探すことができず、研究仲間ができにくい。
時間がない。
学校に行けなくて他の院生との交流が少なくなってきた。
学会がオンラインのため、学外の知り合いがあんまりいないこと。
オンライン学会ばかりで学外のネットワークが広がりにくい。
学会や大学がオンラインになり、コミュニティが作りにくい。
交流が全くなく不安になるが、オンラインの交流はハードルが高く交流ができにくいと感じる。
学会が対面で開催されないこと、地方都市なので近隣に近い分野の研究者が少ないこと、研究者交流の機会が少ないこと。

学会がすべてオンラインとなり、新しいネットワークが広がらなかった。
新しいネットワークが作れない。
学会がオンラインのため、わざわざ連絡を取るのには憚られるような知人と交流が途絶えている。ちょっとした研究のちょっとした相談や雑談をしたいのに、メールやzoomだと形式ばってしまい、連絡を取りにくい。
研究について相談が出来る人との繋がりが無い。
オンラインの通信荷重負担が個人にかかり、パソコンを買い換えるなどの経費だけでも膨大になった。
自分の成果を心理界限以外の場へ情報発信する効果的な術がわからない。自分ができるのはプレスリリースくらい。
他大学の先生に研究の相談をしたり、進路相談や研究室訪問をしたかったけれど、学会がオンラインになってしまい、そういう機会がなくなってしまった。
学会で「ポスター会場などで偶然知り合う」という経験がオンライン学会ではできない。
大学院を卒業すると統計の細かいハウツーの相談相手がいなくなる。
この分野に来たばかりだが、人と繋がる機会があまりない。
学会がオンラインだと、その場で聞きたい質問をすぐにかがえなかった。
学会がすべてオンラインとなり、新しいネットワークが広がらなかった。
もっとネットワークを広げた方がいいのかなというのは常にあります。
学会が現地開催できなくなり新しいネットワークが作りにくい。
周りに院生がいないため、横の繋がりが自然には発生しない。
対面での情報共有が難しい。
新たに研究会に参加したいと思っても、雰囲気かわからずどの程度新規加入を受け入れてもらえるものか測りかねる。
研究分野がマイナーな障害に関するものなので、心理学分野の人との交流があまり広まらない。
同じ研究領域の仲間がいない。
オンライン学会が多くなり、新しい広がりができにくい。
他大学の博士課程の学生や若手研究者との交流が少ない。
新しいネットワークを作りにくい。
オンライン上では、新規のネットワークを構築する機会がない。あったとしても、オンライン上であるため、親交が深まらず表面的なものになってしまう。
学会で対面した情報共有ができなかった。
オンラインで有り難い部分がある一方、移動を控えることで不便が生じている。
学会がオンラインになって、なかなか新しい方に知り合う機会がない。

研究者同士のつながりが得られない。得る方法がわからない。
対面のポスター発表などに比べ、やはりオンラインの学会や研究会では（私のような一番若い世代は特にだと思うのですが、）中々話の輪に入っていくと感じることはあった。
基礎領域の博士前期課程の院生が1人のため、同じ世代の院生がどのように活動しているのかがよくわからない。
学会会場をぶらつくことでアイデアや新しい人間関係ができていたのが、オンラインになりなくなった。多くの若手研究者に関する情報とりまとめや発信は、成功している人・業績が華々しい人・家族の理解や協力が元からある人の例が多く、見ても一介の研究者として生きていく上ではあまり参考にならずむしろ精神的に余裕がなくなってしまふ。
特になし。

Q6. 「キャリア (就職)」について、現在どの程度困っていますか？あなたの考えに最もよく当てはまる数字を選択してください。(必須)

領域	回答数	%
5. 非常に困っている	34	24.46
4.	30	21.58
3.	31	22.30
2.	26	18.71
1. 全く困っていない	18	12.95

Q7. 「キャリア (就職)」の中で、現在特に困っていること、直面している課題を具体的に教えてください。(任意)

内容
現在、就職活動は行っていないが、今後するにあたり業績などが不安である。
常勤雇用だが任期付のため、着任後も今後のキャリアの形成に困難を感じている。
自分が困っているわけではないが、教員公募において、電子応募やオンライン面接がより普及されるべきだと思う。
任期付きの職であるが、その後のキャリアをどう考えていけばよいか難しい。ポストが限られているので、直接知っている関係者との競争の機会が多いことが心理的に負担感がある。
大学の常勤ポストの競争率が高い。1～3年の短い任期が多く、ライフプランを立てづらく、常に不安がある。
自分で開拓するしかない。
自身の専門分野と異なる研究所に就職してしまい、これまで培ってきたものを活かせない。
①推薦者のお願いをしたい昔の指導教官が病気で倒れてしまいお願いできない。②1年ごとに更新の仕事なので育休・産休を十分に取れず、そのため子どもを作れない。
今後取ろうと思っている資格のための情報が少ない。
研究業績がない。
新たな分野にチャレンジしたいですが、その分野における教育歴がありません。
業務、育児に加えキャリアに割ける時間が限られている。
推薦者がいない(正確にはお願いできる人がいない)。書類作りに時間がかかる(どの程度のクオリティが求められているのかがいまひとつわからない)。
転職を考えているが、転職に必要な履歴書やその他の書類を書く時間が無い。
公募書類の正しい作成方法がわからない。面接や模擬授業についても、どのように対策すればよいのかわからない。
研究や教育、ネットワーク形成、何に注力すればいいのかわかりにくい。
就職活動を始められていない、情報を探すのに必死。
賃金が安い。
臨床から今年度より教員になったが、今後(5年程度の中での)の動き方に悩む。
書類の作成に多くの時間を取られる、50代で心理職に転向したが募集要項に年齢制限がないのに数回の審査後に「現在いるスタッフとの年齢構成を考えて不採用」との通知が届いた。

「研究」に関する設問と同様。
あと2年分グラントがあるのでとりあえず大丈夫だがその後どうなるか心配。
大学で非常勤講師をしたいが、自分の領域に関する募集がない。
公募という形にしているが、紹介が基本であること。
特になし。とにかく良いと思える公募に出すしかないと思っている。
該当する公募が数年に一度しか出ない。
書類の作成に多くの時間を取られる、researchmapの印刷のできるのが良い。
将来が見えない。臨床活動をしても業績にならない。
書類の様式が機関ごとに異なることで時間が取られる。
今は特にありません。応募書類のフォーマット調整は苦行でした(5時間程度かかることも)。
お給料が安い。心理士は知識を得るための投資に見合っていない。時給1000台とかで働いている人は、どうやってその辺りをご自身に落とし込んでいるのだろうか。
自分を知ってもらう気軽な機会が少なすぎる。
任期なしで研究ができるポジションがほとんどない。あっても倍率が高すぎる。研究をあきらめれば就職はできるが、それならばアカデミックにいる意味はない。アカデミック全体として、苦し紛れの表面的な若手救済しか行われず、希望がない。院生の支援は増えているが、ポジションは減っているため、意味はなく、むしろ状況を悪化させている
そもそも募集しているポストが少ない。
何が悪くて不採用なのか分からず、改善のしようがない。
そのままドクターになるべきなのか、そこから就職できるのかが疑問。少子高齢化によって、学校数が減っていくことが予想されるゆえ。
任期制の職が続き、将来設計がしづらい。
マッチングが合う公募が少ない。
“ガチ公募”の少なさ。
キャリアパスが明確でないし、そもそもポストがあるのかが不安。
非正規雇用が多い、給与が低いまたは事前に給与が分からない。
書類の作成に時間がとられること。
通常業務の合間に書類の作成をするのが大変。細切れの時間ではできない。
基礎系の科目であっても公認心理士の資格が求められるため、条件が狭められる。
公募情報を見ても、給与や研究費などがわからない。
書類の作成に膨大な時間を消費させられる。
移るべきか、今のままか。
書類の作成に多くの時間を取られる。

任期切れまであと1年半だが研究以外の雑用に忙殺されて公募書類を書く時間が十分に取れない。公募書類の書き方がそもそも合っているのかわからない。
(大学教員の公募に限った話ですが) 大学によって履歴書も教育研究業績書もフォーマットが違うのが非常に非効率。公募の結果の知らせが何もなく、数年後に都合よく面接に呼んできた大学などもあり、足元をみられていると感じる。就職できても、教育と研究以外の仕事の割合が非常に多く、また薄給である。夜に仕事(教育研究以外)が振られ、翌日朝までにまとめろと言われることも年に数度あり、裁量労働制を拡大解釈しすぎた働かされ方をしている。
所属がないと研究が継続できない。
作成に時間・手間がかかる。中々決まらない。
研究職のキャリアに進んだ人が身近にいない。
見通しが立たない。
研究室などでの雑談を通して周囲の研究者がどのように職を得ているかと言った情報を得る機会が失われたため不安を感じる。
今後のキャリアについて相談できる人が周りにいない。
所属大学の先行きが暗い。
業務が忙しくて応募書類作成の時間がない。
任期付きの職しかなく、推薦者もおらず、書類作成に時間もかかり、長期的な将来像を描けない。
指導教員に嫌われると、就職にひびく。行きたい大学に、その先生の知り合いがいると、採用してもらえなそう。
任期付きポストが与えられているが日常業務に追われ業績を増やせない。
任期付きの職場ばかりで、転職できても常に次の転職先のことを考えなければならず、長期目線でじっくり研究に取り組めない。(内々で恩師や先輩からの紹介を得られる人脈や揺るぎない研究スキルがあれば別なのでしょうけど) 職場が安定しない場合、女性特有の出産のタイミングがつかめず、高齢出産で多くのリスクが増してくる。また職場からの理解を得られるのか常に不安である。 若いうちは遠方でもどこでもいくものだという風潮があるが、家族との生活も守りたいし、常に悩ましい。
学外の人と学振についてもっと情報共有したいが、学外の人とつながりがないため、困っている。
研究者にはなりたいが、お金や仕事などリスクが高すぎるため踏み切れない。
特になし。まだ応募できる段階にない。
給与が低い、地方なので非常勤講師先がない。
書類の作成に多くの時間がかかり、アプライする時間がない。

任期なしの公募が少ない。
公募の数が少ない、大学によって書式が異なる。
研究職としての勤務ではなく、臨床で働きながら自分の休みやお金を使っての研究活動が余儀なくされているが、もともと臨床家（国家資格保有）であるため、就職キャリアとしては全く困っていない。
博士課程に進学したいが、心理士の仕事と両立できるのか、社会人院生で研究を遂行できるのか自信がない。また、博士課程で学振が取れるとは限らないため、金銭面の不安がかなりある。
まだM1なので就職に関することは詳しくない。
問い合わせのできる教員の連絡先や、推薦書を求められるような場合には、応募すること自体が難しくなってしまう場合がある。
学位取得後に任期ありのポストを目指すか、安定した給与がある企業就職・兼任研究者をして業績を積んでからアカデミアに戻り出戻りするかなどのキャリア選択。
動物実験施設を持っている大学が少なくなってしまったので、将来、動物での研究が継続できるか不安である。
年々、公募に応募しても激戦になることが増えてきている。
査読付き論文がないとテニユア審査に通らないが査読付き論文を通すハードルが高い。
進学または就職まだ決めていません。
まだ考えていない。
就職先はあるかどうか。
現時点では困っていないが、将来のことを考えると不安になる。
博士課程進学にむけての注意点。
教授同士の繋がりから、本務校の上司である教授に応募していることが伝わらないか心配（現在の常勤職→別の常勤への応募を検討中）。
就活時の待遇の不透明性。
（自業自得だが）業績が足りない。
いい話があれば次を、とも思うけど家庭事情（子どもの学校やローン等）で泣く泣くということもあります。
書類の作成の方が実験よりも多い。
文書作成の協力者が欲しいです。
書類作成が困難。
書式が多様のため、対応に非常に時間をとられる。
所属がないと研究が継続できない。

<p>情報共有する機会が少なく孤独である。一般企業研究職などの情報があまり入ってこない。オンライン申請が安全で便利なので普及すべきだと思う。</p>
<p>大学への採用の基準が不透明過ぎて正直、公募に挑戦する気が失せている。学問の意味を分かっていない人ほど、大学に就職できるシステムになっている。そのため、博士課程への進学率が日本だけ低下の一途を辿っていることにも頷ける。本当に心から研究する楽しさ、深さ、厳しさを伝えようとしている人ほど学問の世界（特に日本の大学）から離れている現状にある。正直、私も離れたいと感じているが、大学以外の場所で心理学系の研究ができる環境があるなら挑戦したいと考えている。</p>
<p>研究室の特性もあり、論文をなかなか出すことができず、就職活動時にハンディキャップになりそうだ。研究職以外のプランも考えている。</p>
<p>ロールモデルが少なく、博士課程後の進路など将来が不安。</p>
<p>仕事内容には満足しているが、非常勤のせいもあり待遇が悪い。</p>
<p>臨床心理学を生かした職業（臨床心理士、公認心理師など）の新卒での常勤職が少ない。</p>
<p>公募書類の形式が異なり過ぎるため統一してほしい。</p>
<p>今後の方向性を大まかに相談できる人がいない。</p>
<p>公募の書式が大学によって異なりすぎる。全部の業績に概要を記載しないとイケないのが意味不明。</p>
<p>各大学のエントリー様式が異なるため、同じ内容を記載しているはずなのに、作成に膨大な時間がかかる。様式はできるだけ統一すべき。</p>
<p>進学したばかりで、まだ博士課程やその先の進路など、（とても厳しい世界ということ以外に）全くイメージが湧いていないこと。</p>
<p>特になし。</p>

Q8. 「キャリア (就職)」についてお伺いします。あなたは公募書類の作成にどのくらい時間をかけていますか？ (必須)

	回答数	%
30分程度	2	1.44
1～2時間程度	10	7.19
3～4時間程度	9	6.47
5～6時間程度	8	5.76
7～8時間程度	2	1.44
9～10時間程度	1	0.72
半日 (11～12時間以上)	11	7.91
1日	7	5.04
1日以上	48	34.53
該当しない	41	29.50

Q9. 「キャリア (就職)」 についてお伺いします。あなたは、対面とオンライン (遠隔) のどちらで公募の面接を受けたいと思いますか？どちらでもよいを「3」として、希望する方の数字を選択してください。(必須)

	回答数	%
5. オンライン希望	24	17.23
4.	16	11.51
3.	61	43.88
2.	17	12.23
1. 対面希望	12	8.63
該当なし	9	6.47

Q9. 「対面」または「オンライン」での面接を希望する理由を具体的にご記入ください。
(任意)

内容
オンラインだと、全ての側面を見てもらえなそう。
地方に住んでいるため。
移動に要する時間や費用を節約できる。また、感染症流行下ではオンラインの面接は互いに感染リスクを避けることができる。
オンラインであれば、移動時間や交通費の節約になり、そのぶん応募者はその他のことに時間やお金を割くことができ効率的であるため。対面面接にしかないメリットはあまり思い浮かばない（全身像やジェスチャーを見ることができるくらい?）。
場所によるが、遠方であればオンラインを希望する。金銭的負担がさほど大きくなければ対面を希望する。
どちらでもよいと感じる。
特になし。それぞれにメリット・デメリットがあるように思う。
オンラインの方が楽。
遠方で面接でも交通費が出ない場合は、コロナ禍に限らずオンラインで面接を希望します。
人と直接会って、話をする方が安心する。
オンラインだと伝えられる情報が限定されてしまいそうだから。
対面の方が、自分の良さを伝えられる気がします。
画面越しで伝えられる情報に限りがあるため。例えば、身振りや立ち振る舞いなどを伝えにくい。
正直、楽だからです。
オンラインだと緊張感に欠ける。カメラに映る自分を見たくない(見られない)。オンラインでいいなら、電話でもよいのでは?とってしまう。
対面の方が慣れているから。
学費や生活費を自分で支払っている関係で、学生のうちは面接のための移動費用を工面しきれない可能性があるため。ただし、自分の人となりを見ていただくという点では対面での面接の方が良いように感じるので、経済的な負担を除けば一長一短だとも思う。
オンラインはとても緊張し、うまく話せない所以对面で緊張しながらも自分の伝えたいことを伝えたい。
オンラインだとその場の雰囲気が分かりにくいから。

実際にオンラインでの就活を行い(3件応募、2件オンライン面接の後2件内定)、オンラインの方が見えない部分があり受け手としては気軽さがあるのかもしれないが、対面の方が所作やその人柄など伝わる(伝えられる)のではないかと感じる。
オンラインだと接続など余計な気を遣いそう。
場合による。遠方の場合はオンラインだとありがたい。
遠方の大学であればオンラインで面接を行った方が経済的だと思う。
対面の方が意思疎通しやすい。トラブルが少ない。
オンラインの場合、面接のために移動しなくて済むので助かります。面接時に応募書類などを見ながら答えられるのもありがたかったです。対面の場合、事前に大学の雰囲気を感じられることもメリットではありますが。
いつの話をしているのかわからない。コロナ禍で移動ができなければオンラインになるし、コロナ禍が収束すれば対面になる。
移動が面倒。
受かるか分からないのに遠方までいくのは辛い。
どちらもどちらでメリットがあるが、コロナ次第としか言えない。
交通費負担が減る。コロナ罹患の心配が減る。
移動に伴う時間&金銭的コストを省くことが可能な為。
対面の方が相手の微妙な反応がクリアに見えて、対応しやすい。また、個人的に、オンラインは言葉を発するハードルが高い。
地理的・時間的な制限の軽減。
地方から地方への移動は非常に時間がかかるため、場所によってはオンラインを希望する。
お互いに相手の様子がよりよく分かり、施設内を見ることが出来るため。
会場に向かわなくて良いため、オンラインの方が融通が効きやすいと思う(ただし、オンライン面接の経験がないため不安はある)。
交通費・宿泊費を抑えられるから。
相手の反応が見えない。
非言語情報を重要視しているため。
交通費が出ないうえ、面接まで行ってどうせ落とされるなら zoom でやって欲しい。
オンラインだとその場の雰囲気が分かりにくい。
交通費が浮くので。
画面越しというだけで緊張がほぐれ、冷静に回答ができる。
どちらもどちらの良さがあるため、どちらでもよいと回答しました。
コロナ感染症対策としてオンラインでの面接を強く希望する。

面接に呼んで頂けても交通費の負担が大きいから。
一長一短。
遠方でも自宅から面接を受けることができ、交通費や宿泊費等がかからないから。
オンラインだと、遠方でも面接が受けられる点が良いと思う。
交通費がかかるため。
一緒に働くであろう先生方に会って、その大学の雰囲気の中で働いていくことができるかまでは、オンラインだと分からないため。実際に、コロナ禍で面接を複数受けたが、対面で良かったと感じたため。
その場の雰囲気を感じ取りたいから。
新型コロナウイルス感染予防に徹底した方が良いから。そうでなければ、対面が良いが、現状は感染終息に遠く、オンラインで出来ることは出来るだけオンラインで行う必要があると思う。
オンラインならば移動の手間がかからないため、時間と費用の節約になる。また、個人的にオンラインのほうが話しやすく感じるため。
オンラインで緊張感が少ない。
コロナ収束後であれば、会場や審査していただける先生方の雰囲気も感じたいため、対面が良いと感じました。
多くの場合、旅費は出してもらえないと思うのでオンラインでの面接を希望する。
オンラインは、うなづきのタイミングがとりにくく、声が被ったりすると音声がかえなくなったりするため。
対面の方が話しやすいため。
県をまたぐ移動は職場的に難しいため。感染は職場に迷惑がかかるため。
オンラインでも十分に実施できると思うから
交通費や年休を使用して負担のみで終わることがないため。
対面が望ましいと思われるが、移動費及び宿泊費の問題がある。
よく遠隔でお会いしたときと対面でお会いしたときの印象のギャップに驚かれるので、対面の方がいいです。
感染のリスクがあるため。
オンライン。
オンラインでは空気感がつかみきれないことと、退室の時の乾燥感に堪えられないと思う。
移動がないから。
オンラインでは、通信の問題など、対面にはない不安要素が増えるため。
交通費の負担が大きいから、交通費の負担をしてもらえるなら対面での面接でもよいと思う。

実際に対面で人と会う方が、得られる情報が増えて（職員の印象などもわかって）いい気がするが、交通の利便性を考えると、対面でもオンラインでもいいように思う。
最終面接では対面が良いと思いますが、オンラインでは遠隔地でも移動時間を気にせず面接ができると思う。
対面では感染リスクがある。
現在コロナ禍で移動を控えているため居住地より感染者数が多い地域への移動を伴う対面限定だと迷う部分があります。
特になし

Q10. あなたの性別を回答してください。(必須)

	回答数	%
男性	77	55.40
女性	56	40.29
回答しない	6	4.32

Q11. あなたの年齢を回答してください。(必須)

	回答数	%
20代	61	43.88
30代	61	43.88
40代	11	7.91
50代	4	2.88
60代	1	0.72
回答しない	1	0.72

Q12. 現在のあなたの職位を回答してください。(必須)

	回答数	%
修士学生	26	18.71
博士学生	23	16.55
ポスドク	16	11.51
助手・助教	20	14.39
講師	16	11.51
准教授	11	7.91
医療関係従事者	5	3.60
民間企業等	11	7.91
その他 (自由入力)		
特任講師	2	1.44
契約研究員	1	0.72
民間企業 (実践系)、専門学校非常勤講師	1	0.72
医療系専門学校専任教員、大学院客員研究員	1	0.72
特任教員	1	0.72
国家公務員	1	0.72
非常勤講師	2	1.44
博士後期課程単位取得満期退学・非常勤講師	1	0.72
回答できない	1	0.72

Q13. 若手の会全体についてのご要望、新企画の提案がございましたらご記入ください。(任意)

内容
<p>大学院教育改革について。教員のあるべき姿を考えてほしい。 → 新企画として検討します。</p>
<p>若手という呼称は年齢が若いことを意味するので、年齢によらず博士号取得からの年数が短いことを意味するためには、early career researcher (ECR) などの呼称に変更することが望ましいと感じています。 → 若手の会 HP のロゴ部分には「JPA Early Career Psychologists Network」と記載してあります。周知を徹底させる方法を検討して参ります。</p>
<p>いつも情報発信や企画をありがとうございます。コロナ禍における若手研究者や若手教員の苦労話や奮闘記などもっと公になっていいのではないかと思います。 → 若手の会コラムリレーの題材の1つにさせていただきます。</p>
<p>ML が活発になればなあ...と思います。地域毎または都道府県単位でのつながりが強まればなあと思います(会員相互検索で若手の会会員かどうかわかると若手のつながりが増える?)。 → 会員の皆様のご承諾が得られた場合、将来的に会員間の所属やメールアドレスなどを全体に公開する予定です(無許可で公開することはありませんのでご安心ください。あくまでも検討段階です)。</p>
<p>修士・博士課程での過ごし方(学位取得に向けて)や就職活動の経験などのお話を色々な方から伺ってみたいです。 → 若手の会コラムリレーの題材の1つにさせていただきます。</p>
<p>在野研究者のプレゼン大会 → 新企画として検討します。</p>
<p>ありがとうございました → ご回答ありがとうございます。</p>
<p>分析について教えて頂ける場があるといいなと思います。主に SPSS など。 → 新企画として検討します。</p>
<p>こうした会自体はよくあるが、それによって事態が改善したと感ずることではない。新しいデータを取ることに苦心して、同様の調査やデータを無視していることが多い。また、シンポジウムを開くことに終始して、一時的に若手の不満を和らげようとするだけで、本質的な解決からほど遠い。困難ではあるが、事態を改善させるところまで進めて欲しい。無理なら最初からやらないで欲しい → 本アンケートで得られた内容を若手の会の提言としてまとめ、若手研究者の実質的な支援となる活動や企画を新しく考えていく予定です。</p>

是非、このアンケート結果を学会開催や公募審査に関わる先生方にフィードバックしていただきます。御足労とは思われますが、よろしくお願い申し上げます。

→ 日本心理学会会員の皆様にアンケートの結果を公開しました。

どこまでを若手とするのかに依りますが、若手の会の連絡が“准教授”の方から回ってきたりすると、正直かなりとっつきづらく参加しづらいです。頑張っている方は悪くないので非常に恐縮ですが、MLへの何かの会合の投稿のときだけでも構わないので、院生などメンバーの中でもより駆け出しの方がしてくださると、多くの若手にとって敷居が低くなるだろうなと思います。こういうことを書いて本当にすみません。

→ 若手の会の企画は、幹事11名それぞれで分担しておりますが、会員全体への連絡は代表幹事が行なっていました。今後は、院生の幹事を含め、企画担当者がご連絡する形に変更します。

新しい研究仲間を作りたいと思います。共同研究で研究資金を獲得したり、学会発表でシンポジウムを開催したりすることを期待しております。そのため、月一回の交流の場を設けて頂ければ幸いです。

→ 新企画として検討します。

オンラインで研究発表会のようなものができると嬉しいです

→ 毎年、異分野間協働懇話会という研究会を設けています。ぜひ、ご参加していただければ幸いです。

特にございません。若手の支援ありがとうございます。

→ ご回答ありがとうございます。

女性研究者のキャリアについて

→ 企画シンポジウムとして検討します。

ワークライフバランスや女性研究者のキャリア形成について知りたい

→ 企画シンポジウムとして検討します。

研究者の複線経路等至性モデルについて、さまざまなパターンがあると思います。しかしながら、さまざまな経路があっても最終的に落ち着く着地点があるとしたら、それはなんだろうか、と思いました。また、若手の会として、研究課題を見つけて計画を立案し、研究する、というスタイルがあっても良いのかもしれない。多岐にわたるプロフェッショナルのいる強みを活かした団体活動も良いと思います。

→ 新企画として検討します。

主眼がそれるかもしれませんが、女性研究者の苦境とそれに対する工夫などについていつか触れてもらえると幸いです。

→ 企画シンポジウムとして検討します。

組織の側の問題として、就活時の待遇の不透明性・就任後の給与面での問題や研究費使用への過度の干渉などが深刻である。対して、研究者の側にも、ハラスメントへの意識の緩さ・締切等への意識の緩さ・対人時の最低限の社会的マナーの欠如等があるように思われる。(若手に限らず、である。) 企業では、働き方改革が進んでいる。研究業界にも、就労規則の明確化や、正当な報酬の支払い、社会的マナーの遵守、ハラスメントの意識といった、「当たり前」が定着することを強く望む。こうした「当たり前」を、いかにして、未成熟な研究業界に持ち込むかを議論していただきたい。

→ 企画シンポジウムとして検討します。

とても魅力的な会だと感じています。若手の目線に立った企画であれば是非参加させて頂きたいです。

→ ご回答ありがとうございます。皆様のご意見を反映して、これまで以上に若手研究者の支援となるような活動をしていきます。

3月の異分野協働懇話会にオンラインで参加しやすかったため初めて参加しました。面白かったです。ありがとうございました。また開催してください。

→ 異分野協働懇話会へのご参加ありがとうございました。楽しんでいただけたようで良かったです。またのご参加お待ちしております。

ハラスメント問題など(しないようにするには/されないようにするには?/されたらどうする?) 上記を含め、よい研究指導、よい学生指導の在り方について、学位取得後すぐの方々を対象に議論されることは良いかもしれないと思いました。

→ 企画シンポジウムとして検討します。